

1596年文禄伏見地震に関する地震像の検討

——伏見・京都での地震被害を中心に——

西山 昭仁*・原田 智也**

I. はじめに

1596年文禄伏見地震は、文禄五年閏七月十三日（グレゴリオ暦では1596年9月5日）の子刻（4日午後11時～5日午前1時頃）に発生して、畿内一円に甚大な被害を及ぼした内陸地震である。この地震に関して、震央は有馬－高槻断層帯付近に、規模（マグニチュード）は $M = 7\frac{1}{2} \pm \frac{1}{4}$ と推定されている¹⁾。

地震による被害は、伏見城やその城下町で甚大であり、伏見城の天守や石垣は崩潰し、史料によって数は様々であるが数百人の圧死者が出た。京都の市街地でも家屋の倒潰によって多数の死傷者が出ており、数多くの寺社で堂舎が大破・倒潰した。また、大坂・堺・奈良でも家屋や堂舎が大破・倒潰して多数の死者が出ており、兵庫では倒潰した家屋から出火して延焼した。この地震の発生直前、伏見や京都では文禄の役（文禄元～五年〈1592～96〉）を終結させるべく、明からの講和使節を迎える準備が行われていた。折悪しく、人々と建造物とが伏見や京都に集中していたその最中に、近傍で大きな地震が発生したため、当該期の豊臣政権の中核であった伏見での被害は拡大したといえる。この地震については、同時代史料にある地震発生年の年号と地震による最大被災地に依拠して「文禄伏見地震」と称する²⁾。

この地震の起震断層に関して、以前は京都盆地と奈良盆地の間にある断層を想定した研究成果がみられたが³⁾、近年では大阪平野北部の有馬－高槻断層帯から淡路島に至る広域の活断層の運動を想定した研究成果が提示されている⁴⁾。一方、近年ではこの被害地震について、地震学の分野だけでなく歴史学の分野においても、同時代史料に基づいて伏見や京都での地震被害が個別に考察されている⁵⁾。以前拙稿においても、この地震を対象にして地震後の人々の動静や被害実態を考察しているが、それ

らの考察には史料の選定や記述内容の分析に不備が散見できるため、被害程度の検討に基づく震度の推定や地震像の考察には利用できない⁶⁾。また、別の拙稿においては紙幅の都合上、この地震における幾つかの被害発生場所での被害状況について検討しているのみであり、地震像を考察するには不十分である⁷⁾。

そこで本研究では、歴史学や地震学における既往研究のうち、史料記述に基づいて地震被害が考察されている研究を参考にしつつ、信頼性の高い同時代史料に記されている信憑性の高い記述内容に基づいて、文禄伏見地震における個々の被害発生場所での被害程度を検討していく。そして、検討した被害程度から被害発生場所ごとの震度を推定し、その震度分布から文禄伏見地震の地震像に迫ってみたい。

II. 被害程度の検討に使用する史料と手法

本研究では同時代史料に基づいて、文禄伏見地震の最大被災地である伏見や地震被害の多発した京都が位置する京都盆地を中心に、畿内各地の被害発生場所での被害程度について検討し、個々の被害発生場所での震度を推定していく。

この地震が発生した十六世紀末の織豊政権期は、その後の江戸時代に比べると現存している史料の数量は必ずしも豊富ではない。しかしこの地震は、公家や僧侶あるいは武家といった記録を書き残す人々が多く居住していた、伏見や京都とその周辺地域に甚大な被害を及ぼした。そのため、公家や僧侶の手になる日記史料をはじめとして、数多くの様々な史料に地震による被害の様相や人々の行動などが記されている。

本研究ではその中から、公家の山科言経が記した日記である『言経卿記』⁸⁾、同じく壬生孝亮が記した『左大史孝亮記』⁹⁾、醍醐寺座主で東寺長者であった僧侶の義演が記した日記である『義演准后日記』¹⁰⁾やその別記の『文禄大地震記』¹¹⁾などに基づいて、京都盆地内や畿内

* 京大防災研

** 無所属

各地での被害程度を検討していく¹²⁾。これらの史料を選択した理由は、地震発生から日数を経ずして記された信頼性の高い同時代史料であり、伏見や京都をはじめとする各地での地震被害に関する記述が多く含まれているためである。これらの史料は、記主である公家の山科言経や壬生孝亮、同じく僧侶の義演が京都やその近郊に居住しており、当人たちが実見した被害状況であるために記述内容の信憑性は高い。また、京都近郊での被害状況については、関係者や縁者の見聞に基づく被害状況であるため、同様に記述内容の信憑性は高いといえる。

一方で、歴史地震における建造物の被害程度を検討するに際して、被害の主因を地震の揺れの大きさに求めるだけでは不十分であり、地震の揺れを受ける側である建造物に関する当時の状態や特性なども検討に加えていく必要がある。そこで本研究では、信頼性の高い同時代史料に記述されている建造物の地震被害を対象として、史料記述にある建造物の被害状況と、地震で被災した建造物の被災前の状態や特性という、双方の要因を用いて被害程度を検討する。このような検討に際して、被災建造物に近接する無被害あるいは軽被害の建造物についても、可能な場合には当時の状態について考察を試み、被災建造物の被害程度を総合的に検討していく。

文献史料に記された文字情報である地震による被害程度について、現行の地震学研究に役立てるためには、文字情報の数値化とそれに基づく震度分布図の作成が必要である。これによって現行の地震学で取り扱う地震との比較・検討が可能になる。震度分布図の作成に必要な要素は次の3つである。それは、史料に記されている文字情報のうち、当時の年月日や刻限を変換した西暦や現行時刻（時間）、当時の被害発生場所の緯度・経度（空間）、地震被害から推定された震度（事象）である。このうち震度（事象）の推定が最も難しく、研究者によって見解の相違が生じやすい要素である。

以下では、同時代史料に記された地震による建造物の被害状況を抽出し、個々の被害発生場所について被害程度を個別に検討し震度を推定する。震度の推定に際しては、宇佐美龍夫氏作成の「歴史地震のための震度表」¹³⁾（第1表）を用いる。なお、本来であれば、史料に記されている全ての被害発生場所について、被害程度の詳細な検討を記載すべきであるが、紙幅の都合上、文禄伏見地震の最大被災地である伏見と被害多発地の京都に関する数ヶ所に限定して、被害程度の検討と震度推定の過程

を提示していく。

Ⅲ. 伏見での被害

以下では、文禄伏見地震における最大被災地である伏見と、宇治川を挟んで対岸に位置した向島での被害程度について検討していく。

1. 伏見城と城下での被害

地震発生前の伏見は、昭和十六年（1941）の干拓工事完了まで京都盆地中央部にあった巨椋池の北岸に位置しており、巨椋池に流入する宇治川・木津川と流出する淀川によって、京都と奈良を結ぶ水上交通の要衝であった。室町時代の伏見は「伏見九郷」と呼称される九ヶ村からなる郷村であったが、天正二十年（1592）八月に豊臣秀吉の命によって、宇治川北岸の伏見に隠居所として屋敷の建設が始められた。文禄三年（1594）二月になると、この伏見の隠居屋敷を本格的な城郭へ造り替える工事が開始され、この時に宇治川北岸の指月の岡に築かれた城郭が第一期伏見城（指月伏見城）である（現、京都市伏見区桃山町泰長老あたり）。城郭の周囲には諸大名の屋敷を中心とした城下町が整備され、これと並行して、築堤による宇治川の流路の固定や宇治川に架けられた豊後橋を通る大和街道の新設など、城下町周辺の土木工事も実施された。宇治川北岸の段丘上に築かれた伏見城では、本丸の周囲に二ノ丸や大名屋敷群が配置され、西側の低地に町人地が展開する城下町が形成されていた¹⁴⁾。

伏見城とその城下町は、豊臣秀吉の政策によって一年半という短期間で建設された新都市であり、当時の大坂と並ぶ豊臣政権の中核に相応しい城郭や大名屋敷群と水陸の交通網が整備されていた。文禄五年閏七月十三日の真夜中に発生した地震によって、伏見城とその城下町は甚大な被害を蒙る事態となった。

山科言経が記した『言経卿記』の閏七月十三日条には、伏見城と城下での被害として次のような記述がある。

一、伏見御城ハテンシユ崩了、大名衆家共事外崩了、江戸内府ニハナカクラ崩了、加々爪隼人佑（政尚）死去了、難人ハ十余人相果了、同中納言殿ニハ侍共ハケカトモ有之、死者無之、但難人ハ六七十人死也云々、其外町々衆家崩之間、死人千ニアマリ了、〔後略〕

この記述によると、伏見城は天守が崩潰しており、大名衆の屋敷は甚だしく崩潰している状況がわかる。記主の山科言経は、地震以前から徳川家康と親交があったようであり、地震発生直後に伏見での徳川家関連の被害情報を入手している。それによると、徳川家康（江戸内府）の屋敷では、長倉が崩れて加々爪正尚が死亡し、下人は10人余が死亡したようである。また、徳川秀忠（中納言殿）の屋敷では、武士（侍）に怪我人はあったものの死人はなく、下人は約60～70人死亡している。

現存する伏見城の絵図は、地震後に木幡山へ移転して再建された伏見城（木幡山伏見城）とその城下町を描いたものであり、地震発生時の伏見城（指月伏見城）とは城の施設や大名屋敷の配置が異なっている。そのため、地震後に移転・再建された伏見城の絵図を用いて、地震時の被害発生場所を特定することは困難である。また、地震前の指月伏見城と城下町については、城郭の構造や諸大名の屋敷の場所など不明な点が多く、これらが要因となって江戸時代初期に成立した諸大名関係の史料では、地震前の指月伏見城の城下町と、地震後に移転・再建された木幡山伏見城の城下町との間に混同がみられる。そのため現段階では、地震で被災した徳川家康や同秀忠の屋敷の位置について明記された史料は確認できておらず、それらの場所については不明である。

なお、上記の記述の末尾には「云々」（……という話である）とあり、これは『言経卿記』の場合に限らず、当該期の日記史料の文末に多くみられる語句である。「云々」と表記されているために、一見するとこの記述は伝聞情報に基づいて記された信憑性の低い内容のように思える。しかし、この場合の「云々」は、文末を間接話法の形で結ぶ語句として用いられており、これは当該期の日記史料における変体漢文の定式的な表記法に過ぎず、末尾に「云々」とあるからといって必ずしも伝聞情報を示しているとは限らない。そこで、本研究では、当該期の日記史料にみられる末尾が「云々」という記述についても、他の記述と同じように基本的に信憑性の高いものとして取り扱う。

先にみた城郭や城下の武家屋敷での被害とは別に、『言経卿記』には「其外町々衆家崩之間、死人千ニアマリ了、」とある。これによると、城下町の町衆の家が崩潰したために死者が千人余あったようである。しかしこの場合、伏見城下での町家の崩潰と死者に関する「死者千人余」という被害記述は概略的で具体性はなく、城下

での死者数が数え切れないほど多かった様子を強調するための表現と考える。

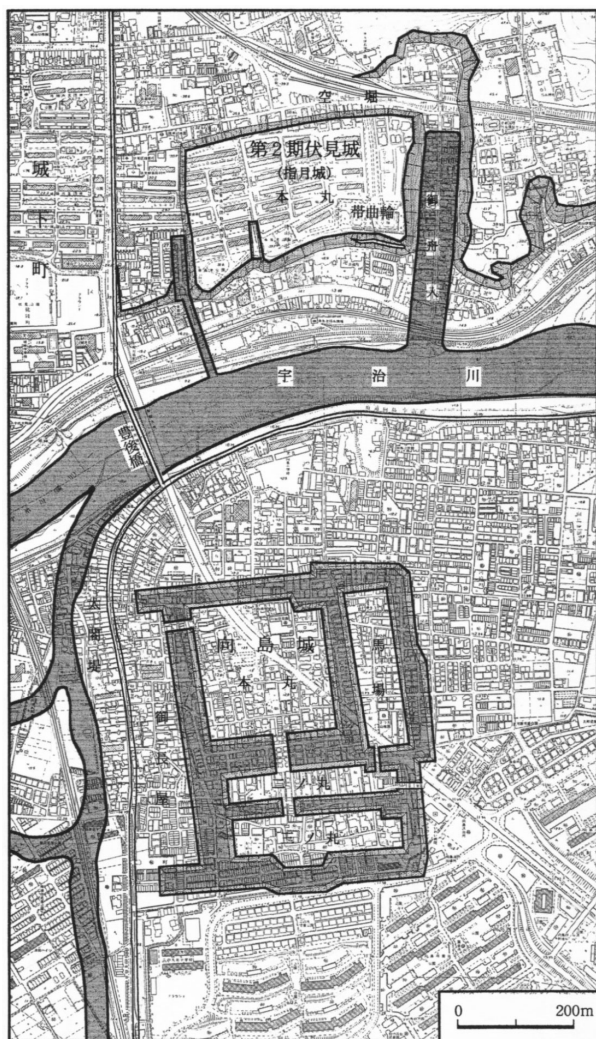
一方で、僧義演が記した『義演准后日記』の閏七月十三日条には、伏見城での被害状況として次のようにある。

伏見事、御城・御門・殿以下大破、或顛倒、大殿守悉崩テ倒了、男女御番衆數多死、未知其數、其外諸大名ノ屋形或顛倒、或雖相殘形計也、其外在家爲躰、前代未聞、大山モ崩、大路モ破裂ス、非只事、〔後略〕

この記述によると、伏見城の門・屋敷などが大破・倒潰し、天守が崩潰しており、城の番衆や城内にいた男女に数多くの死者が出たようである。また、城下の諸大名の屋敷は大破・倒潰しており、城下の町家も同様であったようである。さらに、公家の壬生孝亮が記した『左大史孝亮記』の閏七月十三日条には伏見城での被害として「伏見二丸之女房三百人餘、依地震失命云々、」とあり、伏見城の二ノ丸では地震によって女房（武家に仕える侍女）300余人が死亡したとされる。

以上でみた史料記述からは、地震の大きな揺れによって伏見城（指月伏見城）では天守が崩潰、門や屋敷が大破・倒潰し、周囲の諸大名の屋敷も倒潰して、多数の死者の出た状況がわかる。伏見城内をはじめ城下の大名屋敷や町家において死者が増加した要因として、建造物が数多く大破・倒潰に至った状況が考えられるが、必ずしも理由はそれだけではない。先にI章で述べたように、豊臣秀吉が実施した文禄の役（第一次朝鮮侵略）における講和交渉の結果、地震発生直前の伏見では明からの講和使節を引見する準備が進められていた。そのため、城内の屋敷や城下の町家には、通常よりも多くの武士や侍女あるいは従者や人夫などが集め置かれており、そこへ地震によって多数の建造物被害が生じたために、伏見城内や城下での人的被害が大きくなったと考えられる。

先にも述べたように、地震発生時における諸大名の屋敷や町人地については場所が不明であるため、伏見での明確な被害発生場所は伏見城（指月伏見城）のみである（第1図）。そこで、先にII章で提示した「歴史地震のための震度表」（第1表）を用いて伏見城での震度を推定していく。上記にあるように、伏見城では天守が崩潰し、門や屋敷が大破・倒潰しており、この震度表の「城」の項目に「天守閣にも被害が生じ、崩れるものもある。」



第1図 伏見城と向島城の復元図
(注14の文献の229頁に所収)

(震度7)とあることから震度7と推定する。

2. 向島での被害

僧義演が記した『義演准后日記』の閏七月十四日条には向島について次のような記述がある。

伏見向野〈川中／也〉、去春ヨリ大御普請御城出来、是以大地震ニ石クラ二間余ニエ入ト云々、〔後略〕

また、この日記史料の文禄伏見地震に関する別記である『文禄大地震記』の閏七月十五日条には以下のようにある。

伏見向野〈川中／也〉、當春ヨリ御普請、石クラ等凡出来、地震二間余大地ヘユリ入り云々、〔後略〕

このように、『義演准后日記』と『文禄大地震記』の記述には語句に多少の異同がみられる。しかし、後者の史料は、前者の内容を基にして、後日入手した他の記録を用いて補足・修正された別記と考えられるため、ここでは後者の記述内容の方が信憑性が高いと評価して後者の史料記述を用いる。

宇治川を挟み伏見城の対岸に位置する向島では、文禄三年の冬もしくは翌年の春に、伏見城の支城として向島城（現、京都市伏見区向島本丸町あたり）の建設工事が開始されており、新設された豊後橋によって北側の伏見城下と接続されていた。また向島城は、文禄四年（1595）八月の大雨による洪水で被災しており、翌文禄五年二月から再度工事が開始されていた¹⁵⁾。『文禄大地震記』によると地震発生時には石垣がほぼ完成した状態であり、向島城の石垣は地震によって二間余（約3.6m）地面に揺り込んだ（沈下した）とあるが、その位置は不明である。向島は、伏見城築城の数年前までは巨椋池の中島であり、宇治川の氾濫原に位置していた。そのため、向島では激しい地震動を受けて地盤液状化現象が発生し、それが要因となって向島城の石垣が長さ二間余にわたり、土中に沈み込んだと考えられる。

既往研究によって向島城の場所は明らかにされており、被害発生場所が特定できる（第1図）。そこで、先に提示した「歴史地震のための震度表」を用いて向島城での震度を推定していく。この震度表の「石垣」の項目に「多くの石垣が破損し、崩れるものも少しある。」（震度6）と、「かなりの石垣が崩れ、ほとんどの石垣が破損する。」（震度7）とあることから、向島城の石垣はどちらかの被害程度には当てはまる。上記でみたように、向島城では石垣が地面に揺り込んでおり、地面に揺り込む際には石垣が破損・崩潰した状況が想定できる。但し、その規模については不明なため、震度7よりは小さな震度であったと考えて震度6強と推定する。

Ⅳ. 京都での被害

この当時、多数の人口を擁する日本最大の都市であり、寺社や町家といった数多くの建造物が建ち並んでいたために、地震被害が多発する結果となった京都での被害程度について検討していく。

1. 上京と下京での被害

当時の京都の市街地は、天正十四年（1586）から開始された豊臣秀吉による都市改造によって、新たな街区の整備や旧来の街区の再編成などが実施されていた。この都市改造を通して京都は、上京と下京といった2つの惣町と北野社や祇園社などの門前町から構成された中世後期以来の複合都市から、統一政権の首都となるべく変貌を遂げていた。

古代の平安京における条坊制の区画を引き継いだ碁盤の目のような市街地の町割り、通りに面した方形の四辺のみに町家が建ち並ぶ状態になり、その広い中央部は畑や共同の空き地として利用されていた。その空き地の有効活用を目指して、豊臣秀吉は京都所司代の前田玄以に命じ、京都の上京と下京に対して方形の区画の中央を貫く南北の通りを新設して、長方形街区の造成を進めた。この新造の通りによる長方形街区の造成によって、京都の中心市街地においてより高密度に土地の利用が可能になったとされる。但し、下京の鉾町など中世からの家並みが維持されていた街区では、すでに町家が密集した状態にあり、高密度な土地利用が成されていたらしく、この長方形街区の造成は実施されなかった¹⁶⁾。このような大規模な都市改造によって再編成された京都の市街地は、文禄伏見地震によって多大な被害を蒙った。

当時、本願寺寺内町（下京の南に位置）に居住していた山科言経の記した『言経卿記』の閏七月十三日条には次のようにある。

一、上京ハ少損了、下京ハ四条町事外相損了、以上二（×三）百八十余人死也云々、〔後略〕

この記述によると、京都の上京での被害は軽微であったが、下京の四条町（現、京都市下京区新町通四条下ル四条町あたり）では甚だしい被害があり、上京と下京を合わせて280余人の死者があったとある。このことから、特に当時の下京では庶民の居住していた町家が数多く大破・倒潰し、落ちてきた部材に打たれたりその下敷きになるなどして、大勢の死者が生じたと考えられる。

このように、上京では町家の被害が軽微であったにも拘わらず、同様な町家で構成されていた下京では町家の大破・倒潰によって大きな人的被害が生じた。この被害状況の差異について探るためには、地震発生前、天正末期～文禄期における秀吉の都市改造が実施される前の上

京と下京の概観について確認しておく必要がある。

上京の市街地は、元亀四年（1573）四月の織田信長による上京焼き討ちによって、二条通以北が焼き払われており、その後の再建には数年を費やしていた。そのため上京のほとんどの町家は、信長による焼き討ち以降に建てられたものであり、文禄五年の地震発生時には築後二十年程度を経過していた。一方、下京では秀吉による都市改造によって大半の面積が長方形街区となっていたが、その影響を受けなかった中世以来の鉾町などの街区では、上京よりも築年数の長い町家が高密度で建ち並ぶという状態が維持されていた¹⁷⁾。このような高密度に古い町家が建ち並ぶ下京の鉾町などにおいて、地震の際に町家の多数倒潰が生じて大勢の死者の出した状況が想定できる。その中でも特に大きな被害を生じた街区が四条町とその周辺であったと考える。なお、この当時の町家は、地面に穴を掘って柱を立てる掘立柱ではなく、地面に置いた礎石の上に柱を立てる礎石建てであり、屋根は石置き板葺きであったとされる¹⁸⁾。このような町家の構造に関して上京と下京とで違いはなかった。

これらのことから、上京と下京における地震による被害程度について、上京が軽微で下京が甚大という差異が生じた要因として、被害を受けた町家群における築年数の違いが大きく影響していたと考えられる。そのためこの場合、下京で生じた町家の多数倒潰の要因は、築後数十年という経年劣化が進行した町家にあり、柱の根本が腐朽したり、構造にゆがみが生じたりして、大風や地震による大きな揺れに対して脆弱になっていた状況が想定できる。恐らく、地震の揺れの大きさに多少の相違があったとしても、町家の経年劣化の方が被害により大きく影響を及ぼしていたであろう。対照的に上京では、下京に比べてほとんどの町家が新しく築年数は短く、経年劣化があまり進行していなかったために被害は比較的軽微であったと想定する。

上記のように、上京と下京のうちで被害発生場所が明確なのは下京の四条町であり、町家が数多く倒潰していた。そこで、先に提示した「歴史地震のための震度表」を用いて下京の四条町での震度を推定していく。この震度表の「家屋・建具」の項目には「家はかなり破損し、中には倒れるものもある。」（震度5強）と、「かなり多くの家が倒れる。」（震度6）がある。先に検討したように、下京の四条町の町家では経年劣化が進行して地震の揺れに対して倒れやすく、少し大きな揺れでも倒潰した

状況が想定できるために震度5強と推定する。

2. 方広寺での被害

鴨川の東岸に位置した方広寺（現、京都市東山区大和
大路通正面東入茶屋町）は、天正十九年（1591）五月二
十日に大仏殿の柱立があり、文禄二年（1593）九月二十
四日には大仏殿の棟上げ、翌文禄三年（1594）九月には
屋根瓦が葺き始められており、大仏殿の作事は進捗して
いた。また、方広寺の大仏殿に収められる大仏は金銅仏
ではなく漆喰で造立されており、大仏とその光背には黒
漆が塗られ、金箔が押し貼られていた。文禄三年七月に
は少なくとも大仏は完成間近の状態であり、大仏殿と同
時進行で建設工事が実施されていた。そして、文禄五年
正月には大仏殿の中門の作事が始められ、大仏殿と大仏
はほぼ完成した状態にあり、文禄五年八月十八日には大
仏供養が予定されていたようである¹⁹⁾。このように方広
寺では、大仏の開眼供養を控えていた時期に今回の地震
に遭遇した。

方広寺での被害については『言経卿記』の閏七月十三
日条に次のようにある。

一、大佛ハ堂ハ不苦、但柱ヲ二寸程土へ入了、御
佛ハ御胸ヨリ下少々損了、樓門ハ戌亥方へ柱ユカミ
了、〔後略〕

この記述によると、方広寺大仏殿の被害について表面
上は軽微であったようであるが、柱が二寸（約6cm）
ほど地面にめり込むという、建造物の土台や構造そのも
のに影響を及ぼす被害が生じている。大仏殿内部の本尊
の大仏は、胸より下の部分が少し破損しており、方広寺
の楼門は戌亥（北西）の方角に柱がゆがんだ。また『義
演准后日記』の閏七月十三日条には以下のようにある。

大佛事、堂無爲、奇妙々々、本尊大破、左御手崩
落了、御胸崩、其外所々響在之、後光聊モ不損、中
門無爲、但四方角柱少々サクル、其外無異儀、三方
之築地悉崩、或顛倒、〔後略〕

大仏殿は無事であったようであるが、内部の大仏は大
破しており、左手や胸の部分が崩れ落ち、そのほか所々
にひび割れが生じたが、後光は少しも破損しなかった。
さらに、方広寺の中門は無事であったが、四方の角柱は

少し裂けており、そのほか境内の建物は無事であった。
但し、三方の築地塀は全て崩潰もしくは倒潰したとある。

双方の史料にある被害記述では表現に多少の相違がみ
られるものの、共通した被害状況として、大仏殿の被害
は一見したところ軽微であり、内部にあった本尊の大仏
が被害を受けた様子が窺える。なお、方広寺大仏の構造
と被害状況については『文禄大地震記』の閏七月十四日
条に次のようにある。

大佛殿事 十四日、霽、夜中予罷向了、大佛本堂
無爲、聊モ不損、礎所ニ依テ二寸バカリニエ入也、
本尊ハ大破也、左ノ御手摧テ落ル、御胸同前、其外
無爲歟、雖然、木ヲ以テ骨トナシ、其上ヲシツクイ
ニテ塗タリ、其上ヲ漆ニテヌリテ、金薄悉押ス、大
地震ユリタキマ、ユリ摧タル間、假令氷タル壁ノゴ
トク見了、（中略）中門無爲、但四角柱少々裂バカ
リ也、其外聊以不損、先以珍重、三方ノ築地崩或顛
倒、既以大石ユリ倒了、〔後略〕

このように地震発生時、方広寺大仏殿の内部に安置さ
れていた本尊の大仏は、木製の木組みに漆喰を塗って本
体を造り、表面を漆膠で塗り固めて金箔を貼り付けた塑
像であった状況がわかる。僧義演の当時の認識として、
方広寺大仏は青銅製の本体に鍍金した金銅仏ではなく、
漆喰で造られた巨大な塑像であった。それが地震による
大きな揺れを受けて揺り碎けたために、表面に亀裂が生
じて凍った壁のように見えたようであるが、巨像そのも
のは大破や崩潰には至っていないようである。

このような被害状況から、方広寺で大きな被害を蒙っ
たのは、土を突き固めて造られた築地塀や漆喰で造られ
た大仏といった、地震の強い揺れに対して比較的脆弱な
建造物であったと考えられる。一方で、大仏殿や中門は
軽微な被害を受けたものの壁や屋根瓦は無事であり、外
見上は無被害のように見受けられる。そのため、方広寺
境内での被害は、外周を取り囲んでいた築地塀や、大仏
殿内部に安置されていた漆喰造の大仏で集中的に生じて
おり、全体としては軽微であったと考える。

そこで、先に提示した「歴史地震のための震度表」を
用いて方広寺での震度を推定していく。この震度表の
「社寺」の項目には「寺の鐘が激しく動く。かなり破損
する。」（震度5強）と、「落下する寺の鐘もある。倒れ
る社寺も少しある。」（震度6）がある。方広寺では大仏

殿や中門の被害は軽微であったが、築地堀が崩潰している状況を考慮して震度5強と推定する。

3. 本願寺での被害

先に述べたように『言経卿記』の筆者である山科言経は、地震発生時には本願寺寺内町に居住しており、隣接する本願寺（現、京都市下京区堀川通花屋町下ル門前町）に関する被害について同史料の閏七月十三日条に記している。

一、寺内ニハ門跡（本願寺）御堂・興門（興正寺）御堂等顛倒了、兩所ニテ人二三人死去了、其外寺内家悉大略崩了、死人三百人ニ相及了、全キ家一間モ無之、〔後略〕

これによると、本願寺（現、西本願寺）やその南隣に位置した興正寺（現、京都市下京区堀川通七条上ル花園町）では、御堂などが倒潰して2・3人が死亡し、本願寺寺内町では町家が残らず崩潰して死者が約300人生じており、無事な家は一軒もなかったようである。寺内町での被害状況については『言経卿記』の閏七月十三日条に次のような記述もある。

一、地動ニ相損所々、先私宅ユカミ了、庭上ニ出テ夜ヲ明了、當町ニハ川那日宗兵衛、大野伊兵衛等家顛倒了、其外大破ニ及了、〔後略〕

山科言経の屋敷はゆがみ、言経の居住する町内では町家が大破・倒潰しており、全体として大きな被害であった状況がわかる。

本願寺は、先に述べた豊臣秀吉による京都の都市改造の一環として、天正十九年（1591）八月に大坂の天満から京都の六条堀川へ移転してきた。同時に、脇門跡寺院である興正寺も本願寺境内地の南側に移転した²⁰⁾。その際、本願寺寺内町も共に同地へ移ってきており、境内地の東側に多数の町家から構成される市街地が建設された²¹⁾。

このことから、本願寺寺内町の町家群は本願寺の京都移転以降に建てられたものであり、文禄五年閏七月の伏見地震発生時には長くても築後五年程度を経過しているに過ぎなかった。また、先にみたように当時の町家の構造は、礎石建ての柱で石置き板葺きの屋根が主流であ

り²²⁾、寺院の堂舎などに比べて上部の屋根は軽量であった。本願寺寺内町では屋根が軽いだけでなく、築年数が短く経年劣化がほとんど進行していない町家が多数倒潰して、死者が数多く出ている状況から、地震による揺れが大きかったと想定できる。

本願寺寺内町の西隣の本願寺やその南隣の興正寺では、御影堂や阿弥陀堂などが倒潰している。京都の本願寺の御影堂は、大坂天満にあった本願寺の御影堂を移築しており、天正十九年八月に柱立が行われた。大坂天満の御影堂は短期間で建立され粗末な造りであり、屋根は取葺き（小さく削いだ板で葺いた屋根）であった。そのため、京都へ移築された際に大幅な改築が実施されたと考えられ、屋根は本瓦葺き（平瓦と丸瓦とを交互に組み合わせた屋根）へ変更になっている。また、本願寺の阿弥陀堂は、天正二十年（1592）六月に棟上げが行われた新築の建造物であり、屋根は柿葺き（薄い材木の板で葺いた屋根）であった。一方、同時に移転してきた興正寺の御影堂は新築であるが、屋根材は不明である。興正寺の阿弥陀堂については、大坂天満にあった本願寺の阿弥陀堂が京都への移転時に寄与され移築されたものらしい²³⁾。この大坂天満の阿弥陀堂についても、御影堂と同じく短期間で建立され粗末な造りであり、屋根は取葺きであったと考えられる。

これらのことから、六条堀川へ移転後の本願寺と興正寺の建造物のうち、地震で倒潰した建造物の築年数と屋根材についてまとめると次のようになる。

- ・本願寺御影堂（移築後五年程度、本瓦葺き屋根）
※大坂天満の本願寺御影堂を移築（粗末な造りで大坂時は取葺き屋根）
- ・本願寺阿弥陀堂（新築後四年程度、柿葺き屋根）
- ・興正寺御影堂（新築後四年程度か、本瓦葺き屋根か）
- ・興正寺阿弥陀堂（移築後五年程度か、取葺き屋根か）
※大坂天満の本願寺阿弥陀堂（粗末な造りで大坂時は取葺き屋根か）

本願寺や興正寺の両堂（御影堂と阿弥陀堂）や先述した寺内町の町家群については、本願寺の京都移転以降に建てられた（または移築された）建造物であり、地震発生時には新築後四年～移築後五年程度を経過しているの

みであった。築後の年数が短く経年劣化がほとんど進行していないにも拘わらず、本願寺や興正寺では御影堂（本瓦葺き）・阿弥陀堂（柿葺き・取葺き）が倒潰し、その東側に広がる本願寺寺内町の町家（石置き板葺き屋根、礎石建て柱）が多数崩潰している。本願寺や興正寺の御影堂・阿弥陀堂といった大きな堂宇が倒潰している状況から、屋根が大きく上部が重い構造の建造物が地震の大きな揺れで選択的に倒潰したと考えられる。特に、本願寺御影堂や興正寺御影堂は、屋根が大きく上部が重い本瓦葺きであったために地震の際に揺れやすく、屋根の重量によって倒潰に至った状況が想定できる。一方で、本願寺阿弥陀堂や興正寺阿弥陀堂の場合は、屋根は大きいものの本瓦葺きよりも軽量の柿葺きや取葺きであり、地震の大きな揺れに対して比較的揺れにくい建造物であった。それにも拘わらず、本瓦葺の建造物と同様に倒潰に至っているため、屋根の大きさや重量という建造物側の要因のみで、これらの被害状況は説明できない。また、先にみたように隣接する寺内町では、築後・移築後の年数が短く屋根が軽いという、地震の揺れに対して比較的強い条件を有していた町家群が多数倒潰している状況を考慮すると、この被害状況についても建造物側の要因だけでは説明できない。

このような考察から、本願寺・興正寺の境内や本願寺寺内町での建造物の倒潰については、経年劣化に伴う強度の低下や、屋根の構造や屋根材の種類による揺れやすさ（倒れやすさ）のみに要因を求めることはできない。このように考えると、京都の六条堀川周辺では、ほとんどの建造物を倒潰させるほどに地震の揺れが大きかったと想定するのが適切であろう。

上記で検討した被災建造物のうちで被害発生場所がわかっているのは、本願寺と興正寺のそれぞれの御影堂と阿弥陀堂であり、寺内町の町家の場所については不明である。そこで、先に提示した「歴史地震のための震度表」を用いて、被害発生場所が明確な本願寺と興正寺での震度を推定していく。この震度表の「寺社」の項目には「落下する寺の鐘もある。倒れる社寺も少しある。」（震度6）と「かなりの社寺が倒壊する。」（震度7）がある。本願寺と興正寺の境内では、御影堂や阿弥陀堂の他に倒潰した建造物は不明であり、数多くの建造物が倒潰した状況は想定できないために震度6強と推定する。

4. 東寺での被害

義演の手になる『義演准后日記』の閏七月十三日条には、東寺（現、京都市南区九条町）での被害状況について次のような詳細な記述がある。

東寺事、食堂・同中門・講堂・灌頂院・南大門・北八足門・東小門・鐘樓、此分顛倒、塔婆・鎮守八幡宮・御影堂・同四足門・同唐門・灌頂院ノ門二字・慶賀門・寶藏并不開門・穀屋之内少々相殘、此分無為、不顛倒、〔後略〕

このような記述内容については、この日記史料の記主で東寺長者を務めていた義演が実際に見分した被害状況である可能性があり、東寺の伽藍についての具体的かつ詳細な被害記述であるために信憑性は高いと考える。なお、別記の『文禄大地震記』にある東寺の被害記述については上記とほぼ同じ内容である。一方、『言経卿記』の閏七月十三日条には東寺での被害状況について「東寺ハ塔・鎮守八幡社・大師堂、此外七ツ崩了、但坊々不苦也云々、〔後略〕」とある。これによると東寺では、塔（五重塔）・鎮守八幡宮・大師堂（西院御影堂）のほかに7つの建造物が崩潰したが、坊舎の被害は軽微であったようである。この記述内容は先の『義演准后日記』とは異なっており、『義演准后日記』によると五重塔・鎮守八幡宮・大師堂（御影堂）は倒潰に至らず無事であったとある。

このように、『義演准后日記』と『言経卿記』はともに信頼性の高い日記史料であるが、その記述内容には相違がみられる。この2つの日記史料は、双方とも地震発生から数日以内に被災地で書き記された史料であり、筆者や来歴が明確な同時代の日記史料であるために評価基準はAとなる²⁴⁾。このように双方とも評価基準Aの場合には、情報源により近い史料を採用するのが妥当と考える。そのためこの場合、東寺での被害記述に関しては『言経卿記』ではなく、地震発生前より東寺長者を務め、真言宗教団の内部事情に詳しい僧義演が記した『義演准后日記』を採用する。

先にみた『義演准后日記』の記述によると、東寺の境内では必ずしも全ての建造物が倒潰には至っておらず、倒潰した建造物と破損のみで倒潰しなかった建造物が混在している。そこで次では、東寺での被害程度を検討するために、東寺の境内にあった建造物のうちで地震発生

前の状態が判明しているものについて考察していく。

倒潰した食堂・講堂・灌頂院は、本瓦葺きの重く大きな屋根を有しており、そのうち講堂・灌頂院は築後百年以上経過していた。一方で、倒潰しなかった鎮守八幡宮・御影堂・同唐門は、檜皮葺きの比較的軽い屋根であった。そのうち御影堂は築後二百年以上経過しており、経年劣化の進行による強度の低下が想定できるが、途中で修復されているために強度は保持されていたと考える。また、築後二年の塔婆（五重塔）は、本瓦葺きの重い屋根であったが倒潰には至っていない。

これらの被害状況から、東寺の境内で倒潰した建造物には、本瓦葺きで屋根が重いものや、築後百年以上を経過し修復が施されていないために経年劣化が進行しているものが多かった²⁵⁾。これらの建造物は、屋根が重い構造や経年劣化による土台や部材の腐朽などによって、地震による強い揺れを受けた際に揺れやすく、部材や接合部が破損しやすくなっており、各部での破損が拡大・進行して倒潰に至ったと考えられる。

上記でみたように、東寺の境内では建造物の被害状況が個別に判明するものの、建造物によって被害程度には大きな差がみられる。そこで東寺での場合は、個々の建造物の被害程度に対応した震度ではなく、東寺の境内全体における震度を推定していく。先に提示した「歴史地震のための震度表」の「寺社」の項目には、「落下する寺の鐘もある。倒れる社寺も少しある。」（震度6）と「かなりの社寺が倒壊する。」（震度7）がある。東寺の境内では複数の建造物が倒潰しているが、倒潰に至った建造物は地震の揺れに対して脆弱であったために震度6弱と推定する。

5. 天龍寺での被害

僧義演の手になる『文禄大地震記』の閏七月十七日条には、天龍寺（現、京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町）での地震被害について「天龍寺悉顛倒候了、」とあり、京都盆地北西に位置する天龍寺では建造物が全て倒潰したように記されている。天龍寺の被害状況に関するこのような簡略な表現からは、地震の大きな揺れによって天龍寺が壊滅的な被害を蒙ったように思える。しかし、地震による被害程度を検討するためには、地震発生時、天龍寺の境内にどれ程の規模や数の建造物があったのか明らかにする必要がある。

天龍寺は、応仁二年（1468）の兵火によって焼失して

おり、その後の復興は容易ではなく室町時代末期には寺勢も衰退していた。天龍寺の本格的な再建が開始されるのは、朱印地が寄進された豊臣秀吉の時代を経て、黒印地が安堵されて経済的に安定した江戸時代以降であった²⁶⁾。そのため、文禄五年時点の天龍寺は、室町時代末期と同じように形ばかり再建された状態であり、境内の堂舎は数棟程度と少なく、そのほとんどの築年数が百年を経過していたと考えられる。

今回の地震による被害として、『天龍寺文書』²⁷⁾所収の同時代史料である古文書「七五九 前田玄以書下（折紙）」（文禄五年八月三日付）には「当寺境内并諸塔頭門前百姓、今度地震家損崩候とて、他郷へ罷退事可為曲事、〔後略〕」とある。この史料から、天龍寺では境内だけでなく塔頭や門前の百姓の家屋が、地震で破損・崩潰していた状況が窺える。同文書所収の「七六〇 前田玄以書下（折紙）」（八月十一日付）によると、天龍寺も地震によって破損しており、大工を三人召し抱えている。また、同文書の「七六一 前田玄以書下（折紙）」（八月十三日付）によると、天龍寺法堂のための材木（大小二百五十本）を丹波国から運ぶ計画について、前田玄以より丹波国の川並中へ伝えられている。さらに、同文書の「七七〇 就法堂再造定諸奉行之事」（慶長三年一正月二十三日）によると、天龍寺法堂の再建に際して慶長三年（1598）一月二十三日に諸奉行が定められている様相がわかる。

これらの史料記述からは、天龍寺法堂に関して再建が必要なほど大きな被害であった状況が窺え、恐らく地震によって倒潰に至ったと考えられる。『天龍寺文書』に基づく以上のような検討から、天龍寺では少なくとも門前の百姓の家屋は破損・倒潰しており、天龍寺の境内でも大工による修理を必要とする程度の破損のあった状況がわかる。さらに、境内の建造物では法堂が倒潰しており、その再建工事について約一年半後まで協議されたようである。

再建工事について史料から窺えるのは法堂のみであるため、天龍寺では伽藍を構成する重要な建造物の一つである法堂（本瓦葺き）のみが倒潰に至り、他の建造物や塔頭の堂舎は倒潰には至らず、破損・大破した程度であったと想定できる。このように、天龍寺の重要な建造物である法堂が倒潰し、門前の家屋でも倒潰が生じたために、天龍寺では地震で全て倒潰したかの如く「天龍寺悉顛倒候了、」と表現されたように思える。

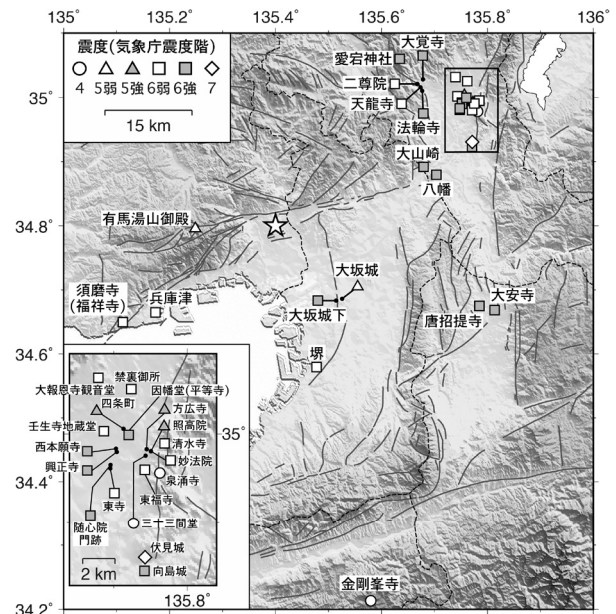
そこで、先に提示した「歴史地震のための震度表」を用いて、天龍寺での震度を推定していく。この震度表の「寺社」の項目には「寺の鐘が激しく動く。かなり破損する。」（震度5強）と「落下する寺の鐘もある。倒れる社寺も少しある。」（震度6）がある。天龍寺では法堂のみが倒潰しており、他の建造物は破損・大破した程度と想定できるために震度6弱と推定する。

V. 推定震度に基づく震度分布図の作成

以上のように、1596 年文禄伏見地震における最大被災地の伏見や被害多発地の京都での被害発生場所について、同時代史料に記されている建造物の被害状況と被災前の建造物の状態や特性に基づいて被害程度を検討し、被害発生場所ごとに震度の推定を試みた。本研究で検討した被害発生場所や推定した震度について一覧表を作成した（第2表）。この表には、Ⅲ章やⅣ章で提示した被害発生場所だけではなく、紙幅の都合上、検討の内容を記載していない畿内各地での被害発生場所も含まれている。またこの表では、1596 年文禄伏見地震の被害分布と地震像を検討するために、上記で用いた信頼性の高い同時代史料に加えて、奈良・有馬・須磨での被害発生場所については、史料批判を経た信頼できる二次史料を使用している²⁸⁾。

第2表で提示した被害発生場所の緯度・経度と推定震度に基づいて、1596 年文禄伏見地震の震度分布図を作成した（第2図）。この図からは、京都盆地とその周辺で数多くの寺院が大破・倒潰といった大きな被害を受けていた状況がわかるが、京都の東山では軽微な被害の寺院もある。また、京都盆地中央部の伏見では伏見城や向島城での被害が大きかったが、盆地北部の京都では被害の大きい場所と小さい場所が混在している状況が窺える。先に検討したように、京都では個々の被害発生場所において、築年数や屋根の重量といった建造物の状態や特性が被害程度に影響を及ぼしており、盆地北部全体で地震の揺れが大きかった状況は考え難い。仮に、盆地北部における地震の揺れが大きければ、建造物が一様に大破・倒潰といった大きな被害を受けていた可能性が想定できるが、そのような状況はみられない。そのため文禄伏見地震の震央は、盆地北部に近い京都盆地内ではなく、盆地中央部に近い京都盆地の外側にあったと想定できる。

参考までに第2図には、宇佐美龍夫編の『日本被害地



第2図 1596 年文禄伏見地震の震度分布図

(☆印は注1の文献の推定震央を示す)

※本図の地形データについては、国土地理院の基盤地図情報サイト (<https://www.gsi.go.jp/kiban/index.html>) にある「基盤地図情報（数値標高モデル）の10mメッシュ（標高）データ」を使用した。断層情報については、活断層研究会編『[新編] 日本の活断層一分布図と資料』、東京大学出版会、1991、437頁を引用しており、太灰色はこの文献による活断層を示す。

震総覧』²⁹⁾で提示された有馬－高槻断層帯沿いの推定震央(☆印)を示している。本研究で検討した京都盆地での被害状況や作成した震度分布図を用いて勘案すると、1596 年文禄伏見地震の震央については、提示されている位置よりも東寄りに推定した方が適当と考える。本研究によるこのような推定震央の妥当性の検証については、簡便法による地震動評価などさらなる検討を必要とするため、今後の研究の進展に委ねたいと思う。

VI. おわりに

本研究では、信頼性の高い同時代史料に記されている信憑性の高い記述内容に基づいて、1596 年文禄伏見地震における被害発生場所での被害程度を検討し、被害発生場所ごとに震度を推定して震度分布図を作成した。本研究で使用した地震関連史料の特徴や、本研究を通して明らかになった地震被害の検討に関する手法についてまとめると次のようになる。

文禄伏見地震において被害が甚大であった伏見や京都には、文禄五年当時の人々の注目を集める伏見城や方広寺などの建造物が数多くあり、それらの被害状況が複数

第2表 1596年文禄伏見地震の主な被害発生場所と推定震度

被害発生場所	現住所	北緯	東経	推定 震度 ※1	史料記述	史料名称	史料記述 の信憑性 ※2
愛宕神社	京都市右京区嵯峨愛宕町	35.05986944	135.6344583	6+	愛護（宕）一山坊令悉顛倒、無殘所云々、諸大名茶壺摧テ成微塵了、近年當山ニ上置故也、	『文禄大地震記』	A
大報恩寺観音堂	京都市上京区今出川通七本松上ル溝前町	35.03148333	135.7396	6-	北野經堂、壬生地藏堂、其外民屋方々令顛倒、或死人等多云々、	『左大史孝亮記』	A
大覚寺	京都市右京区嵯峨大沢町	35.02810556	135.67835	6+	大覺寺門跡、御殿以下倒候了、	『文禄大地震記』	A
禁裏御所	*京都市上京区京都御苑	35.02515278	135.7619806	6-	主上大庭構御座御也、諸家各祇候、御殿所々顛倒、夜明後入御云々、	『左大史孝亮記』	A
二尊院	京都市右京区嵯峨二尊院門前長神町	35.02094167	135.6679583	6-	嵯峨二尊院近年繁昌、是以顛倒候了、	『文禄大地震記』	A
天龍寺	京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	35.01564444	135.6737639	6-	天龍寺悉顛倒候了、	『文禄大地震記』	A
法輪寺	京都市西京区嵐山虚空蔵山町	35.010095	135.677051	6+	亮淳權僧正嵯峨法輪寺ニテ求聞持執行、今度大地震、彼堂大破、既顛倒之式云々、仍破壇敷、	『義演准后日記』	A
四条町	*京都市下京区新町通四条下ル四条町	35.00295833	135.7566472	5+	上京ハ少損了、下京ハ四条町事外相損了、以上二（×三）百八十余人死也云々、	『言経卿記』	A
壬生寺地藏堂	京都市中京区仏光寺通坊城上ル壬生柳ノ宮町	35.00161944	135.743325	6-	北野經堂、壬生地藏堂、其外民屋方々令顛倒、或死人等多云々、	『左大史孝亮記』	A
因幡堂（平等寺）	京都市下京区烏丸通松原上ル東側因幡堂町	34.99948333	135.760275	6+	因幡堂過半倒云々、	『文禄大地震記』	A
清水寺	京都市東山区清水一丁目	34.99478333	135.7846194	6-	清水寺無爲、但廻廊谷へ倒候了、	『文禄大地震記』	A
西本願寺	京都市下京区堀川通花屋町下ル門前町	34.99181111	135.7516861	6+	寺内ニハ門跡（本願寺）御堂・興門（興正寺）御堂等顛倒了、兩所ニテ人二三人死去了、其外寺内家悉大略崩了、死人三百人ニ相及了、全キ家一間モ無之、	『言経卿記』	A
方広寺	京都市東山区大和大路通正面東入茶屋町	34.99154167	135.7724667	5+	大佛事、堂無爲、奇妙々々、本尊大破、左御手崩落了、御胸崩、其外所々響在之、後光脚モ不損、中門無爲、但四方角柱少々サクル、其外無異儀、三方之築地悉崩、或顛倒、	『義演准后日記』	A
照高院	京都市東山区妙法院前側町	34.99039722	135.7753917	5+	妙法院門跡廊顛倒、照高院臺所少々損、	『義演准后日記』	A
妙法院	京都市東山区妙法院前側町	34.99039722	135.7753917	6-	大佛ノ妙法院門跡廊倒、太閤御新造ノ廊也、	『文禄大地震記』	A
興正寺	京都市下京区堀川通七条上ル花園町	34.989975	135.7521444	6+	寺内ニハ門跡（本願寺）御堂・興門（興正寺）御堂等顛倒了、兩所ニテ人二三人死去了、其外寺内家悉大略崩了、死人三百人ニ相及了、全キ家一間モ無之、	『言経卿記』	A
三十三間堂	京都市東山区三十三間堂廻り町	34.98788333	135.7717056	4	卅三間堂無爲、	『文禄大地震記』	A
随心院門跡	京都市南区九条町（観智院）	34.98273889	135.7479444	6+	随心院門跡事、近年當寺北八足門ノ西方ニ建立之、今度悉顛倒、観智院堂（瓦葺）・同臺所顛倒、凡相果了、寶嚴院藏堂以下顛倒、寶泉院殿（瓦葺）、顛倒、寶菩提院臺所倒、其外坊々大破、或顛倒、委不及記之、	『義演准后日記』	A
東寺	京都市南区九条町	34.98076111	135.7477	6-	東寺事、食堂・同中門・講堂・灌頂院・南大門・北八足門・東小門・鐘樓、此分顛倒、塔婆・鎮守八幡宮・御影堂・同四足門・同唐門・灌頂院ノ門二字・慶賀門・寶藏并不開門・穀屋之内少々相殘、此分無爲、不顛倒、	『義演准后日記』	A
東福寺	京都市東山区本町十五丁目	34.97995833	135.7711889	6-	東福寺、一寺凡無爲、但二王門顛倒、其外少々倒敷、	『文禄大地震記』	A
泉涌寺	*京都市東山区泉涌寺山内町	34.97814722	135.7813639	4	泉涌寺無爲云々、	『文禄大地震記』	A

被害発生場所	現住所	北緯	東経	推定 震度 ※ 1	史料記述	史料名称	史料記述 の信憑性 ※ 2
伏見城	* 京都市伏見区桃山町 泰長老	34.93068889	135.7713583	7	伏見事、御城・御門・殿以下大破、或 顛倒、大殿守悉崩テ倒了、男女御番衆 數多死、未知其數、其外諸大名ノ屋形 或顛倒、或雖相殘形計也、其外在家爲 牀、前代未聞、大山モ崩、大路モ破裂 ス、非只事、	『義演准后日記』	A
向島城	* 京都市伏見区向島本 丸町	34.92311944	135.770975	6+	伏見向野〈川中ノ也〉、當春ヨリ御普 請、石クラ等凡出來、地震二間余大地 ヘユリ入り云々、	『文禄大地震記』	A
大山崎	* 京都府乙訓郡大山崎 町字大山崎小字西谷	34.8918	135.6795028	6+	山崎事外相損家悉崩了、死人不知數了、	『言経卿記』	A
八幡	* 京都府八幡市八幡城 ノ内	34.87945556	135.7036639	6+	八幡在所是又悉家崩了、	『言経卿記』	A
有馬湯山御殿	兵庫県神戸市北区有馬 町	34.795737	135.248595	5-	湯の山御ウヘ御殿大ぢしんにそこね申 候をつくろい申候入用	「摂州有馬湯山町 古文書」 ^{*3}	B
大坂城	大阪府大阪市中央区大 阪城	34.686374	135.525836	5-	大坂ニハ御城不苦了、町屋共大略崩了、 死人不知數了、	『言経卿記』	A
大坂城下	* 大阪府大阪市中央区 内本町一丁目	34.683414	135.514523	6+	大坂ニハ御城不苦了、町屋共大略崩了、 死人不知數了、	『言経卿記』	A
唐招提寺	奈良県奈良市五条町	34.675065	135.784849	6+	慶長元年丙申秋閏七月、大地震、此時 戒壇、僧堂、庫院、弥陀堂、不動堂、 鐘楼、山門、廻廊、僧坊西神社、及楼 門等、悉倒、金殿、講堂、東塔等、并 破壊、	『招提千歳伝記』 ^{*4}	B
大安寺	奈良県奈良市大安寺一 丁目	34.668489	135.813605	6+	慶長元年之大地震ニ堂舎悉致破滅、住 居難成候、	「大安寺再興願」 ^{*5}	B
兵庫津	* 兵庫県神戸市兵庫区 中之島二丁目	34.664854	135.173308	6-	兵庫（攝津）在所崩了、折節火事出來 了、悉焼了、死人不知數了、	『言経卿記』	A
須磨寺 （福祥寺）	兵庫県神戸市須磨区須 磨寺町四丁目	34.649738	135.111792	6-	文禄五季〈丙ノ申〉潤七月十二日夜半 ノ大地震ニ本堂・三重宝塔・権現地形 供ニ蓮池内迄九輪ト候、此堂ハ貞治 四季ノ建立、堂上掛り候、	『當山歴代』 ^{*6}	B
堺	* 大阪府堺市堺区戎之 町東三丁	34.579476	135.477559	6-	和泉堺事外相損、死人余多有之、	『言経卿記』	A
金剛峯寺	和歌山県伊都郡高野町 高野山（根本大塔）	34.21341667	135.5799472	4	高野山無爲、安堵珍重、大塔九輪ノク サリ四筋共ニキル、ト云々、	『文禄大地震記』	A

*：被害発生場所が厳密に特定できないため、被害発生区域の中心に緯度・経度を設定したもの。

※ 1：注 13 の文献の「第 4 表 歴史地震のための震度表」に基づいて推定。

※ 2：注 24 の文献の「表 1. 史料記述の信憑性と評価基準」に基づく。

※ 3：日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成 別巻 第 4 巻』、吉川弘文館、1996、396 頁。246 ～ 247 頁に所収。

※ 4：国書刊行会編『続々群書類従 第十一 宗教部』、続群書類従完成会、1969、586 頁。

※ 5：太田博太郎・他編『大和古寺大観 第三巻』、岩波書店、1977、317 頁。64 頁に所収。

※ 6：小池義人監修・三浦真厳編『摂津国八郡 福祥寺古記録 須磨寺「當山歴代」』、校倉書房、1989、301 頁。

の史料に記されて伝存しているために、被害に関する記述内容が多くなっている。この地震は十六世紀末に発生した被害地震であるために、現存する史料が多い畿内であっても後世の江戸時代の場合と比べて同時代史料の数量は少なく、史料記述から導き出せる被害発生場所は限定される。そのため、個々の被害発生場所での被害程度の検討が重要になり、同時代史料に記されている建造物の被害状況だけでなく、建造物の被災前の状態や周辺の被災しなかった建造物も含めて、全体の被害程度を検討し震度を推定していく必要がある。

今後は本研究で用いた研究手法について、他の歴史地震にも適応しつつ適宜修正を加えていき、史料記述にあ

る被害状況と建造物の特性から被害発生場所ごとの被害程度を検討し、推定震度を導き出す手法を確立していきたいと考える。

謝辞

本稿の第 2 図の作成に際しては、GMT (Wessel and Smith, 1991)³⁰⁾ を用いました。また、匿名の 2 名の査読者から頂いた建設的なご意見やご指摘は、本稿を改善する上で大変役に立ちました。ここに特記して感謝を申し上げます。次第です。

付記

本研究はJSPS科研費JP23710202、JP26350474、JP18K00922の成果の一部である。

注釈

- 1) 宇佐美龍夫編『日本被害地震総覧 599-2012』、東京大学出版会、2013、724頁。
- 2) 「慶長伏見地震」と呼称される場合もみられるが、「慶長」はこの地震発生から約三ヶ月半後の十月二十七日に改元された年号であり、日記史料や古文書など同時代史料に記されている地震発生は「文禄五年」閏七月十三日である。そのため、地震発生の年月日を正確に表記するためには、改元前の「文禄」の年号を用いる方が適切である。
- 3) 大長昭雄・山本武夫「文禄五年（慶長元年、一五九六）の伏見桃山地震—新史料を加えた総括」、(萩原尊禮編『続古地震—実像と虚像』、東京大学出版会、1989、364～383頁。)
- 4) 寒川 旭『秀吉を襲った大地震』、平凡社、2010、277頁。
- 5) 歴史学的手法で地震被害を検討した研究として次の文献が挙げられる。松岡祐也「『言経卿記』に見る文禄五年伏見地震での震災対応—特に「和歌を押す」行為について—」歴史地震 21、2006、153～164頁。三枝暁子「天正・文禄の大地震と京都改造」、(都市史研究会編『年報都市史研究 20』、山川出版社、2013、79～94頁。)
- 6) 西尾和美「文禄五年閏七月地震とその被害」災害・復興と資料 10、2018、1～12頁。
- 7) 以前に発表した拙稿は以下のとおりである。西山昭仁「文禄5年の伏見地震直後の動静—公家・寺社・朝廷を中心として—」歴史地震 10、1994、1～17頁。同「文禄5年の伏見地震直後の動静②—武家・民衆を中心として—」歴史地震 11、1995、1～14頁。同「文禄5年（1596）の伏見地震の被害実態—伏見城・方広寺大仏について—」歴史地震 12、1996、117～129頁。
- 8) 西山昭仁「近世京都における地震災害」、(吉越昭久・片平博文編『京都の歴史災害』、思文閣出版、2012、195～208頁。)
- 9) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 言経卿記 七』(岩波書店、1971、426頁)所収。
- 10) 近藤瓶城編・近藤圭造校訂『改定 史籍集覧 第廿五冊 新加別記類 第二』(近藤活版所、1902、750頁)所収。
- 11) 弥永貞三・鈴木茂男校訂『義演准后日記 第一』(続群書類従完成会編『史料纂集』、1976、329頁)所収。
- 12) 震災予防調査会編『大日本地震史料』(思文閣、1973、1253頁)所収。
- 13) 宇佐美龍夫『歴史地震事始』、自費出版、1986、185頁。末尾の「第4表 歴史地震のための震度表」を参照。
- 14) 山田邦和「伏見城とその城下町の復元」、(日本史研究会編『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』、文理閣、2001、198～240頁。)
- 15) 前掲注 14)。
- 16) 玉井哲雄「都市の計画と建設」、(朝尾直弘・他編『岩波講座 日本通史 第11巻 近世1』、岩波書店、1993、69～106頁。)、横田冬彦「城郭と権威」、(同上、237～282頁。)、中村武生「豊臣政権の京都都市改造」、(日本史研究会編『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』、文理閣、2001、89～112頁。)、土本俊和『中近世都市形態史論』、中央公論美術出版、2003、559頁。
- 17) 前掲注 16)。
- 18) 高橋康夫『京町家・千年のあゆみ 都にいきづく住まいの原型』、学芸出版社、2001、254頁。
- 19) 河内将芳『秀吉の大仏造立』、法藏館、2008、227頁。
- 20) 本願寺史料研究所編『本願寺史 第一巻』、浄土真宗本願寺派、1961、554頁。本願寺史料研究所編『本願寺史 第二巻』、浄土真宗本願寺派宗務所、1968、777頁。
- 21) この時期の本願寺寺内町の街区構成については、次の文献の192頁に図と解説がある。高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門 I 空間』東京大学出版会、1989、250頁。
- 22) 前掲注 18)。
- 23) 前掲注 20)。
- 24) 西山昭仁「文政京地震（1830年）における京都盆地での被害要因の検討—棧瓦葺屋根の普及による被害の拡大—」地震研究所彙報 Vol. 85 No. 1/2、2010、33～47頁。「表1. 史料記述の信憑性と評価基準」を参照。
- 25) 光井 渉『日本の歴史的建造物 社寺・城郭・近代建築の保存と活用』、中央公論新社、2021、269頁。木造建造物では、日常的に行われる補修、十年から数十年単位で行われる一般的な修理、百年から二百年に一度程度で行われる根本修理、この各段階を適切に実行することで、寿命は飛躍的に延びるとされている。
- 26) 原田正俊編『天龍寺文書の研究』、思文閣出版、2011、702頁。
- 27) 前掲注 26)。
- 28) 史料に基づく被害状況の検討や震度の推定に際して、同時代史料（一次史料）だけでなく後世に成立した編纂書など二次史料を使用する際には、史料記述の出所や由来や伝播の経路などを吟味し、記述内容の信憑性を検討する史料批判を経る必要がある。
- 29) 前掲注 1)。
- 30) Wessel, P. and W. H. F. Smith, "Free software helps map and display data", *EOS Trans. AGU*, Vol. 72, Issue 41, 1991, pp. 441-446.